

いじめっ子に再会したら、
いきなり求婚されました②

夜果堂書房／高瀬ザクロ

第一話

新居のベッドルームには、真新しいシーツの匂いと昨夜の名残りが入り混じって漂っていた。

カーテンの隙間から朝の光が差し込み、純白のシーツの上に寝転ぶ新妻——芹沢あさひの白い脚を照らす。

「……ほんとに、結婚したんだな」

湊はその寝顔を見つめながら、小さく呟いた。

教会で誓いを交わしたあの日から、まだ夢を見ているようだ。

寝返りを打ったあさひの胸元からレースのキャミソールがずると滑り落ちる。

ふつくらとした乳房の丸みが、朝の光を受けて淡く輝いていた。
薄い桜色の乳首がかすかに尖り冷えた空氣に敏感に反応していた。
そこに視線を奪われた瞬間、湊の理性は一気に揺らぎ、喉の奥で
熱い息を飲み込む。

「ん……湊？」

目をこすりながら振り向いたあさひの唇に、ためらいなく己の唇を
重ねた。

「おはよう……。悪い、我慢できない」

低くかすれた声が、耳朵を熱く震わせる。

「……朝から、なの……？」

眠たげに目を開いたあさひが問いかけると、湊は首を振った。

「朝だから……したいんだよ」

言葉と同時に、湊の大きな掌が胸元へと潜り込む。

むにりと揉み上げるたびに張りを含んだ肌が小さく反発する。

「っあ……んっ……!」

親指と人差し指で先端をきゅっと摘まれると、乳首が敏感に硬さを増し、逃げ場なく捕らえられる。

あさひは背筋を反らし、身をよじった。

「そんな、いきなり……」

「いきなりじゃなくて、昨夜の続き」

何度も肌を重ねてもなお飽き足らない。

朝の光に晒されたあさひの肌に触れるたび、湊の欲望は新しく渴き

を覚えていった。

桜色の頂に唇を寄せ、熱く吸い上げる。

「ひゃんっ……！ そんな強く……ああ……っ」

「結婚したんだから、もう全部俺のものだ……何度だって味わう」
舌先で乳首を転がし、もう一方の胸を荒々しく揉みしだく。

胸から伝わる熱が波紋のように広がり、あさひは下腹部がじんわりと疼いているのをはつきりと自覚した。

「湊……っ、だめ……ゆうべもあんなにいっぱいしたのに……」

「昨日も今日も……あさひは俺の嫁なんだから、毎日抱く」

両脚を無理やり開かれる。

昨夜、繰り返し注ぎ込まれた精がまだ乾ききらずに秘裂に残り、

内腿を伝ってとろりと光っていた。

下着を身に着けず眠っていたそこに指先が触れた瞬間、
ぐちゅりと淫らな音が弾ける。

湊はいやらしく笑みを浮かべた。

「……ほらな。昨日の俺がまだ残ってる」

「や……そんなこと言わないで……っ」

あさひの頬が羞恥に赤く染まり、視線を逸らす。

湊は熱を帯びた先端を割れ目に押し当て、ぬるりと擦り上げた。

そのたびに蜜と残滓が絡み合い、粘ついた水音がいやらしく響き、
二人の息をさらに荒らす。

「……挿れるぞ」

耳元に低く囁かれ、あさひはシーツをぎゅっと握りしめた。

「……うん」

返事と同時に、湊の肉棒が一気に奥へと沈み込む。

「っあ……ああッ……！」

甘い悲鳴が喉を突き抜け、全身が大きく跳ね上がった。

「やっぱり……最高……何回抱いても飽きないっ」

ベッドのスプリングがぎしぎしと軋み、汗ばんだ肌がぶつかると同時に水音が濃く響く。

荒々しいピストンに合わせて、あさひの腰は突き上げられるように大きく揺れ、胸も激しく弾んで波打った。

「んっ……あっ……やぁぁん……あぁ……っ！」

潤んだ瞳から涙が零れ、声は快樂にかすれて止まらない。

「エロい声もつと聞かせて……」

湊は奥を抉り、快感を容赦なく刻み込んでいった。

肉棒の角度が変わるたび、あさひの全身はびくびくと痙攣し、爪先まで甘い痺れに捕らわれた。

「やつ……朝から……だめだよ……っ！」

湊の腰が止まらない。

荒い息を吐きながら、何度も何度も奥を抉る。

「……っあ、ああ……っ！ もう、湊……イクツ……っ！」

「あさひ……っ、俺、も……もう……」

あさひは震える両脚で必死に湊の腰を受け止める。

「んああっ……湊ッ……」

湊は奥深くまで一気に突き上げ、そのまま根元まで押し込むと、全身を硬直させた。

瞬間、灼けるように熱い奔流が押し寄せ、子宮口を直撃する。

びくん、とあさひの身体が跳ね、甘い声が喉から迸った。

「熱……っ、中に……いっぱい……っ！」

湊は腰を密着させたまま、止めどなく精を吐き出し続ける。

新婚の朝を彩るにはあまりに淫らで濃厚な交わり——。

だが二人にとっては、それこそが何よりの幸福だった。

フライパンでたまごを焼きながら、あさひは時計を睨んだ。

「やばっ……ほんとに急がないと会社遅刻しちゃう……」

慌ただしくご飯を盛り、味噌汁をテーブルに並べる。

エプロン姿で台所に立つその背中、いかにも新婚らしい家庭的な雰囲気包まれていた。

その愛らしい姿を見つめる湊の視線は、すでに熱を帯びている。

「……台所にいる奥さんって、本当に可愛いな」

背後から囁く声。

振り返る間もなく、腰に回された腕に抱きすくめられた。

「ちよっ……だめだって、もう時間ないの！」

「ああ、わかってる。……挿れなくてもいい。舐めさせて？」

低い声に、背筋がぞくりと震える。

「湊……ほんとに、さすがにもう無理だから……」

「いいから、エプロンのまま……ここに、もたれて……」

強引にカウンターへ押さえつけられ、上体を預けたあさひの背筋が小さく震えた。

スカートを捲り上げられ、下着を横にずらされる。

むき出しの秘部に、ひやりとした空気が触れた。

「やつ……だめだって……!」

「俺の可愛い奥さんの、中まで見せて……」

湊の親指がぐいと割れ目を押し広げる。

柔らかな花びらが左右に開かれ、奥まで晒し出された。

「……やらしいな。ひくひくしてる」

その囁きに、あさひの頬は羞恥で真っ赤に染まる。

次の瞬間、そこへ舌がぬるりと差し込まれた。

「ひゃあっ……あっ……っ！」

舌先がじゅるじゅると音を立てながら奥へ潜り込む。

同時に、親指がクリトリスを押し出すように強調し、その突起をぐりぐりと弾く。

「ああっ……っ、そんな……だめえ……っ！」

クリトリスを指で責められながら、舌が膣内を出入りする。

いやらしい水音が響き、腰は抑えようとしても勝手に跳ね上がる。

溢れた蜜が太腿を伝い、床にぽたりと染みを作った。

「朝から……甘すぎる味だな。……俺の奥さん」

低く熱を含んだ声が落ちてくる。

羞恥で震えながらも、痺れるほどの快樂が逃げ場を与えない。

「だめ……っ、もう……っ、イっちゃ……いそう……!」

腰を押さえつけられ、舌と指に責め立てられたあさひは、涙で滲む瞳で振り返る。

濡れそぼった秘部を自ら両手でぐっと広げ、震える声で懇願した。

「……いじわる……そんなふうにされたら……欲しくなっちゃうって知ってるくせに……お願い、挿れて……中に欲しいの……!」

必死な姿に、湊は喉を鳴らし、唇を歪めた。

「やっぱり……俺の奥さん、最高だ」

次の瞬間、熱いものが後ろから一気に奥へ沈み込む。

「——っあああッ！」

膣奥を抉られる衝撃に、あさひの身体が大きく跳ね上がった。

台所に卑猥な水音と甘い悲鳴が重なり、テーブルの茶碗がかたんと揺れてご飯粒が散った。

吊り戸棚のグラスまで小さく震え、カトラリーがかちやかちやとぶつかり合う。

「あっ、ああ、気持ちいい……湊お……！」

突き上げられるたびに白い尻肉がぐわんと揺れ、肉厚な音を立てて湊の腰を受け止める。

カウンターに押しつけられた胸も、荒々しい律動に合わせてぶるん

ぶるんと揺れ、エプロン越しに形を変えながら小刻みに弾む。

「……愛してる、あさひ……っ」

肉のぶつかる鈍い音と湿った水音が台所いっぱいに満ち、生活の場が淫らに塗り替えられていった。

エプロンはめくれ上がり、腰の曲線に汗が艶を走らせる。

「んっ……だめえ……っ、もう……イク、イク……っ！」

「一緒に……！」

激しい突き込みと同時に、湊の熱が奥深くで弾ける。

どくどくと脈打ちながら子宮を叩きつける濃厚な奔流。

「——っあああッ！」

あさひはカウンターに爪を立て、背中を反らせ絶頂に震えた。

——二人は慌ててシャワーを浴び、着替える。

乱れた食卓に残る、冷めた味噌汁とこぼれたご飯粒。

「もう……ほんとに遅刻なんだから！」

「俺の奥さんが可愛すぎるせいだなあ」

「ばか……」

笑いながら玄関を飛び出す二人。

台所に残った甘い匂いが淫らな新婚生活の証のように漂っていた。

第二話

あさひはキッチンで湯気の立つ鍋をぼんやりと見つめながら、壁の時計に視線を移した。

針はすでに十時を回っている。

「……今日も遅いんだ」

湊は今朝「夜は接待だから先に寝てな」と言い残して出社した。最近、湊の仕事はさらに忙しさを増している。

残業に会食、そして取引先との接待――。

まだ新婚旅行にも行けていない。

湊が外で過ごす時間が増えるたびに、胸の奥に小さな棘が刺さる。

ふう、とため息を吐いたその時、玄関の鍵が回る音がした。

「……ただいまあ」

あさひは振り返ろうとした。

けれど胸の奥がざわめき、表情は強張ったまま。

「……誰と飲んだの」

思わず口をついて出た問いに、湊は一瞬だけ目を瞬かせた。

次いで、ふっと優しい笑みを浮かべ、彼女の頬に手を添える。

「なんだ、そんな顔して。……怒っちゃってる？」

そう囁きながら、湊は彼女をそっと抱き寄せた。

「ちがつ……そうじゃなくて……」

「毎日帰りが遅くてごめんな」

言葉を遮るように唇を塞がれ、深く吸い込まれる。

舌が優しく絡みつき、喉の奥まで熱が押し込まれる。

「んっ……んんっ……！」

スカートをそつと捲られ、タイツが滑るように剥ぎ取られる。

濡れた布越しに秘裂を指でなぞられた瞬間、腰がびくりと跳ねた。

「……もう濡れてる」

「ちが……っ、それは……！」

否定の声にくすりと笑い、下着を横にずらす。

露わになった割れ目はすでに熱を帯び、とろりと蜜が溢れていた。

人差し指と中指で柔らかな花びらを広げ、指先を沈める。

「ひゃっ……ああ……っ！」